



おおあし

第7号

《 大芦小HP <https://oashi-e-konosu.edumap.jp/> 検索 》

本をたくさん読もう ～何のために本を読むのか～

例年より遅れていた、山の木々もようやく色づき始めたとの便りが聞かれるようになり、少しずつ秋の深まりも感じられる季節となりました。本校では10、11月に「本をたくさん読もう」という生活目標を掲げ、先生方や高学年の児童が「おすすめの本」を紹介するために図書室に展示したり、様々なジャンルの本に親しんでもらうために「読書ビンゴ」という取組をしたりして、読書に対しての意欲を喚起し推進しているところです。

平成30年度に行った文化庁の「国語に関する世論調査」（16歳以上）によると、1ヶ月に本を1冊も読まないと答えた割合は47.3%であり、ほぼ2人に1人は本を読む習慣がないという結果であったそうです。この読書量の違いによってどのような差異が生まれてくるのかを調べた調査結果等が種々様々あり、その見解が示されています。読書量との相関関係を表したその内容は、あくまでもそのような傾向が見られるということが前提ではありますが、例えば知識量や語彙力の豊富さ、コミュニケーション能力の高さをはじめとする「学力」との関係性を示すもの、また、視野の広さや想像力の豊かさ、好奇心の旺盛さや礼儀正しさといった「人間性」との関係性を示すもの、さらには年収や役職、情報収集やスキル獲得のスピードといった「将来性」との関係性を示すものなどが例として挙げられています。ちなみに本校の児童の読書量は、今年度の埼玉県学力学習状況調査（4～6年）によるアンケート項目において、1ヶ月に本を1冊以上読むと答えた児童の割合は上記調査を大きく上回る数値でした。

現代は興味のある情報が簡単に手に入るような時代です。ですからわざわざ本を読まなくても、検索してしまえばすぐに答えは得られることが多く、逆に本であると時間がかかることもあります。しかし、それはあくまでもその情報を調べるための作業であり、その事柄全体像をよく知るためには、やはりそれに関する著書を読んだ方がはるかに多くの知識が獲得され、正確により深く理解できることでしょう。「本をたくさん読みましょう。」と推奨しているのは、ちょっと調べたいことを知るために行っているのではないということです。

ただ、本を読むことそれ自体が目的になってはいけません。読んだ冊数だけを取り上げて評価することがあってはならないと考えます。読書の醍醐味は、今まで知らなかった情報を知ることだけでなく、新しい見方、考え方を自分に取り入れることでもあります。気に入った話を繰り返し読む良さもありますので完全に否定はできませんが、例えば「ももたろう」の話を何回も読んで、〇冊読んだ、すごいねとは評価できないでしょう。新しい知識や見方、考え方を得て、自分はどういうことを学び考えたのか、できれば周りにアウトプットできると有意義であろうと思います。「この本、読んだことがある、知っている。」だけでなく、その先にある自分の考えを獲得することが大切です。また、アウトプットできる方面に偏りが出ないように、様々なジャンルの本に親しむことは、新しい見方や考え方をものにできるチャンスを増やすことにもなります。

子どもたちは知的好奇心が旺盛です。同時に、年齢が上がるにつれて読書量が少なくなる傾向もあるようです。この文章を書きながら、私自身も自分を見つめ直しています。文化庁の調査結果の平均以上を目指します。

(校長 横尾 臣)